

2012年後期 江戸の本づくり

第7回 現代の和本事情 和本の市場

はしぐち こうのすけ
橋口 侯之介



古い本が残る国

世界的に見ても、100年200年以上前の書物がよく残されている国である。それはヨーロッパの人達も口を揃えていう。中国の古籍(日本では江戸時代から唐本と呼ばれてきた清朝以前の本)ですら、中国では民間の保存が少ない。最近では日本に買い出しに来るほどである。

それは日本人が平安時代からずっと、書物は「残し伝えるもの」という意識が強かったからである。だから、千年持つ紙(変色はするが、化学的に劣化はしない)をつくりだし、メンテナンスが容易な装訂(造本)を考え出してきた。それが現代でも続いてきた。中にはたくさんつくられて今でも数が多すぎるものや、内容の低い、いい加減な本もあるが、それら全体が「文化遺産」とわたしは考える。

この遺産を伝えることは、現代人の重要な役割である。和本を入手した者は「一時のお預かり物」という意識が必要。古本屋もその一端を担うつもりである。

しかし、近代以降の洋本(洋装でパルプから作る洋紙に活版印刷の書籍)は一部で劣化が始まっている。百年単位で考えて本をつくる発想はないので、これからどうなるか……。いっそ近代以降の本は電子化したほうが「持つ」かもしれない。

中世の保存

中世まで、書物は主として寺院や公家の家で保管されてきた。とくに寺院の役割は大きく、仏教書だけでなく、歴史や文学、中国の古典(漢籍)、あるいは文書まで幅広く残してきた。一人で持てる大きさの木箱(櫃)に入れておき、もし火事や地震があったら、寺の人達がそれを持って避難したという。

江戸の古書市場

江戸時代に入ると、本の伝存は個人の蔵書家に移った。集めるだけでなく、周囲の人に開放した。また大名も藩校などの教育機関を設けてその図書館の役割を果たして本を集めた。それらの仲介役が本屋である。古書として流通させる機能を有していた。その中心は本屋仲間が公的に認めた古書市場である。市場を開設するのは本屋の中から出てきて「市屋」ともいった。そこに仲間は「市株」を与えて公認した。そこには多くの本屋が集まるので、仲間の伝達事項や奉行所からの達しなどをおこなう場でもあった。

参加できるのは、本屋仲間に入っている店と、許可された「売り子」などと呼ばれたフリーの人たちである。売り子は「セドリ」ともいわれて近代まで続いた。各本屋や売り子たちが顧客などから仕入れてきた本が市場に出され、主として本屋が買った。本屋は専門があって得意分野あった。

また、市場には本のほかに板木も売買された。

市場の役割は、本を売りたい者と買いたい者が競るのを仲介する場である。競るのは、買いたい者多いと高くなり、逆だと安くなる。自然に相場ができ、売る方も安すぎないように最低値を設定できる。

魚市場などで声を出しておこなう競りに対して、紙などに価格を書いて市場運営者に判定してもらう方法を入札という。今は〈にゅうさつ〉というが江戸時代は〈いれふだ〉といった。

現代の古書市場

現代は都道府県単位で「古書組合」があって、自主的に運営されている。小説・三上延『ビブリア古書堂の事件簿』に出てくる市場は神奈川の古書組合(横浜にある)が舞台。どこかの組合に入っている店は全国どこの市場にも参加できる。東京は神田にある「東京古書会館」で行われ、毎日開かれている。月曜日はサブカルチャー的な大衆本、水曜日は資料や社会科学、木曜日は一般書、金曜日が近代資料や文学書を専門にする「明治古典会」となっている。

火曜日の市が「東京古典会」という名称で、和本を専門に扱う。全国の古書店から送られてくる和本が毎日大量にさばかれる。点数にして500点前後、冊数にしたらその数倍になる。

古典籍大入札会

ふつうにかんがえる本の形態だけでなく、多彩な方法で本はつくられてきた。しかも奈良時代から明治期までの長い時期の本がある。その中から最低価格 10 万円以上と想定される本を集めて年に一回お祭りに開催されるのが「古典籍展観大入札会」である。今年で 101 年目を迎える伝統の催しである。

およそ 2000 点が今年も出る。その目録もつくられ、全点が会場で展示される。その展示には誰でも見ることができる。文化財的な高価な本でも、実際に手にとって触ることすらできる。

入札は古書業者だけで行われるので、欲しい本があるときは、古書組合に入っている店に依頼して代行入札してもらう仕組み。会社でおこなれるオークションとはそこが異なる。

展観日時：2012 年 11 月 16 日(金)17 日(土)AM10:00-1800(17 日は 16:30 まで)

場所：東京古書会館(千代田区神田小川町 3-22)

<http://www.koten-kai.jp/catalog/information.php?siID=23>



入札方法

入札する方法の基本は昔からそう変わらない。現代では、出品された本ごとに入札封筒が置かれ、買いたい本があったら紙に値段と店名を書いて(札という)、その封筒に入れる。時間がくると順に係によって封筒があげられ、最も高い札をいれた店に落札する。

出品される本は、相場がしっかりしていて、買い手が多く見込まれる本は一点で単独入札されるが、多くは関連する本を集めて一括して入札される。会場は百坪(330 m²)ほどの部屋に並べられた机や壁面にいったんすべて展示される。さらに和本はコの字型に配置された机に業者が坐り、そこで本が回され、じっくり見て入札される。落札したものは、係によって『富嶽百景』は〇〇万円で△書店さん』などとアナウンスされる。

古書の入札の特殊なところは、競りの要素を紙にも合わせもった方法がとられることだ。

1 万円以上 3 枚札 10 万円以上 4 枚札 100 万円以上 6 枚札 という規定があり、一人一枚のみの参加だが、一枚の中に複数の価格が書いて、その複数の価格で比較されて最も高い価格に落札する。



333,000	159,990	409,990	250,000
289,000	137,770	351,990	189,000
250,000	126,000	301,990	160,000
219,000	105,000	269,990	130,000
一番堂	ビブリア	成蹊堂書店	吉祥寺屋